

寺子屋に学ぶ

江戸時代の日本は、多くの人々が異国の世界を知らなかった。だが彼らは切磋琢磨を忘れず、武道に励み、学問にも精を出した。教練として武家の子ども達は学問所や各藩の藩校に通い、町屋の子ども達は寺子屋に通って己の心身を磨き続けたのであった。この結果、識字率は何と世界最高峰の教育水準値に高められていたのである。

ただ量的数値が高いのではない、その教育の精度が今日の学校教育が抱えているさまざまな問題を解決する手がかりとなるくらい優れていたのである。基礎的学力の習得法や人格形成を重用した習学制度が群を抜いていたからにはほかならない。勿論、体罰などは行われず、ひとり一人の子どもに見合った適性能力を教師・訓蒙師が引き出していく本格的な個別学習であった。

だが、この優れた学問の礎であった学問所・藩校も寺子屋も近代明治の画一的な学校教育によって不運にもこの日本からは消滅してしまったのである。

今現代教育の最高学府にあって学ぶあなた方にとって、文字を理解し、日々の生活に潤いを持つ「学びの楽しみを知る」ことをお勧めしよう。高学歴人口は今の私たちの方が高いのに、折々の季節に和歌や俳句を詠むといった麗しき慣習は江戸の人たちに軍配を上げざるを得ない。

この意味からも、とりわけ江戸時代の町屋を中心とした寺子屋の存在を知って、ここで学ぶ庶民の息吹を求め、これを手本に「学ぶことの楽しみ方」を少しでも具現できればと願うばかりである。

手習いということばの風景

おおらかにのびのびと子ども達は寺子屋の師匠について学ぶ姿は、享和四年（一八〇四）の歌川豊國（初代）画「風流てらこ吉書はじめけいこの図」〔公文研究会蔵〕などに描き出されている。墨をする女の子、筆で紙が真っ黒になるまでひたすら文字を書き続ける年上の女の子、その子に傍らから手ほどきする師匠の助手、そして中央には、まだ年は行かない男の子に手を添えて筆の扱い方（筆法）を伝授する美人の女師匠が描かれ、その右上には大きな欠伸をしながら筆を天に振り翳す子、左上には手本帖を掲げて渡そうとするもう一人の女師匠が描かれている。左斜め下にはここで教えた文字の幾つかが展示されている。

「読み書きそろばん」と称せられた寺子屋だが、その実風景を醸しだしている。元は寺院を中心に子弟教育がはじまったので「寺子屋」と云うという説があるが、このことはその元にもなった当時の教科書である「往来物」のなかにその発端についての記載が見えている。

学ぶための机は入門の日に持参する。この机を「天神机」と云う。「天神様」は学問の神様、北野天満宮すなわち、平安時代の人物菅原道真公のこと、彼を祀った。今でも受験の御利益を願って多くの受験生が北の天神に願いを託す光景を知っていることだろう。寺子屋の規模は、まちまちであるが、夫婦で営むことが多かったようである。男師匠と女師匠による役割分担があつて、二階で男師匠が男の子に、一階では女師匠が女の子に各々に見合ったことばを学習していくのである。

家の前には、「御家 筆蹟稽古所 ○○堂」や「筆道指南」などという門札を掲げている。

改編 寺子屋の教科書『往来物』

その一「往来物」の種類(元は、小泉吉永氏文章欵)

往来物は、次に示す十二の種類に分類されている。

- 1 古往来。 2 教訓科。 3 社会科。 4 語彙科。 5 消息科。 6 地理科。 7 歴史科。 8 産業(実業)科。 9 理数科。 10 合本科。 11 女子用。 12 詩歌往来

古往来

本邦最古の編纂とされる藤原明衡作『明衡往来』(『雲州消息』『雲州往来』)は、江戸時代に入って板行されるようになる。寛永十九年(一六四二)の京都の板元によるものが初出であり、版を重ね江戸後期にも流布していた。こうした中古・中世に成立して、江戸時代に刊行された往来物を「古往来」と呼んでいる。代表作は、十二ヶ月の月往返状として編纂された『庭訓往来』であり、江戸時代全般そして明治まで流布している往来物である。

教訓科

子供への教戒を内容としたもの。最も著名なものに「実語教」と「童子教」がある。前者が平安末期、後者が鎌倉時代の成立とされているが、いずれも作者は不明である。江戸時代には広く一般に流布し、注解を加えたものや絵入りの者などが表れた。「実語教」の冒頭部は「山高きが故に貴からず、樹あるをもつて貴しとす、人肥たるが故に貴からず、智あるをもつて貴しとす」、「童子教」は「それ貴人の前に居ては、頭露に建つ事を得ざれ、道路に遇わば跪いて過ぎよ」というもの。このほかに日常生活の躰について具体的に述べ

た往来物も出版されている。元禄八年(一六九五)刊行の「手習新式目」は、京都の手習師匠の笹山梅庵によつて著され、手習いの必要性を説く第一条から始まる。

社会科

社会生活に必要な知識のみならず、趣味・教養に関する内容も含んだもので「慶安御触書」のような法令も教科書として使用された。江戸時代後期から現代に至るまで、この法令が紹介されるに至ったのは、観農の教訓もしくは啓蒙書として村々に配布され、広く人々に浸透していったためと推測される。美濃岩村藩や掛川藩、出羽米沢藩などで出版されている。

語彙科

往来物とは狭義に手紙文を収録したものが、時代を経るにつれて手紙文に頻出する単語・短句・短文を収録したものが現れるようになる。こうした分類の中で広く普及した往来物に『小野篁哥字盡』がある。刊本の初出は寛文二年(一六六二)で、幕末・維新时期にいたるまで広く流布した往来物の一つである。

消息科

消息とは手紙の意味である。文字通り手紙の文例、もしくは手紙で頻出する単語や短句などを収録した往来物を言う。いわゆる「消息往来」と呼ばれる往来物は、手紙文そのものではなく、頻出する単語・短句を書き並べたものを言う。ちなみに、近世になって刊行された代表的な往来物に「風月往来」がある。

地理科

地名を収録した往来物に該当する。明和二年(一七五八)刊行の「御江戸名所方角書」などがあるが、冒頭は「御城外東者、和田倉、八重洲河岸……」と始まり、江戸城を起点として東西南北と時計回りに江戸の地名・名所などを例記している。都市江戸の発展に伴い、増補・改訂がなされ、広く普及した。

歴史科

曾我兄弟のあだ討ち、源平合戦、太平記、大坂の陣など史上の人物、事件を取り上げた往来物をさす。必ずしも史実とは限らず、源義経や徳川家康などがしたためたとされる書状が教材となっている。歴史上の人物の古い書状をいくつか収録した体裁のため、「古状揃」と呼ばれる。この中に、あの上杉景勝の家臣、直江兼続が徳川家康の難問に対して応酬するという「直江状」もあるという。

産業（実業）科

「商売往来」は、江戸時代に最も流布した往来物の一つであった。商業活動をする上で必要な文字、貨幣や商品名はもとより、商人生活の心得も収録している。

農業では「農業往来」「田舎往来」などがある。工業では「番匠作事文章」が初出である。また「諸品寸法往来」のように材木や石材、紙類などの標準寸法を記した往来物もある。この往来物には大工や左官などが実際にを行うために必要な知識が収録されている。

理数科

自然科学に関する往来物はそれほど多くないが、「塵劫記」のような和算に関する書物は多種類のものが出版された。また「身体往来」のような生理学に関する往来物も著されている。

合本科

複数の往来物を一冊の本として合本したものの。宝永二年（一七〇五）に刊行された「寺子往来」は堀流水軒作で、「用文章」「沽券状」「預り証」「諸諸状」「寺子教訓書」「船由来記」といった往来物から成っている。

女子用

女性用の往来物として「女今川」「女実語教」などの女訓書が刊行されているが、中でも明治以降も出版さ

れ続けた「女大学」はよく知られている。これには本文とは別に編集された「女職人之図」「同商人之図」といった挿絵や、「百人一首」「世継草」「同産前之次第」などといったものが加わって、単なる教訓書としてだけでなく、教養書、もしくは百科事典として版を重ねていった。

詩歌

漢詩である平安時代の『和漢朗詠集』を基調として、漢詩と和歌を配分編纂した往来物と鎌倉時代の定家卿編纂の『小倉百人一首』を基調とした往来物とが江戸時代にも刊行され、町家庶民の生活に、堂上家の伝える詩歌が教養手本習い歌として編纂され出版を見た。